

赦すことは強さの証し —ガンディー 非暴力と不服従—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

イギリスからの悲願の独立は苦渋の分離独立となった。第2次世界大戦後、ヒンドゥー教徒が多数の地域はインド、イスラム教徒を中心とする地域はパキスタンとして独立する。両国の宗教的対立は激化し、ついに戦争に突入した。

苦悩するマハトマ・ガンディー（1869—1948）は断食など身を挺して悲惨な争いを食い止めようとした。当初から分離独立に反対し、ヒンドゥーとイスラムの融和による真の独立をめざす。

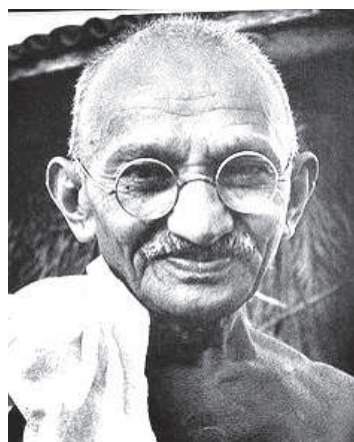
しかし血で血を贖う戦いは容易に終わらない。憎しみはさらなる憎しみを生み、その鋒先は独立運動の先駆者でマハトマ＝偉大なる魂と呼ばれたガンディーにも向けられていく。

南アフリカにおける真理と勝利

ガンディーはイギリス領インド帝国グジャラート州の港町ポールバンダルで生まれた。父親は地域のいくつかの藩王国の宰相を歴任していた。四男一女の内気な末っ子で当時の幼児婚の慣習に従い13歳で兄たちと共に結婚する。

18歳になると宗主国イギリスの首都ロンドンに渡り、ロンドン大学などで熱心に法律を学ぶ。その傍らインド哲学に関心を持ちヒンドゥー教の要となる宗教的叙事詩『バガヴァッド・ギーター』が唱える不殺生の精神に感銘を受ける。ロシアの文豪トルストイの『戦争と平和』なども精読し、キリスト教的人道主義に共感した。

弁護士資格を取得後、イギリス領の南アフリカでインド人唯一の弁護士となる。現地では大量のインド系移民が金やダイヤモンドを発掘する過酷な労働を強いられていた。ガンディー自身も列車の車掌に



マハトマ・ガンディー

蔑まれて乗車を拒否されるなど白人優位の人種差別主義に強い憤りを覚える。

インド人に指紋登録を強制して管理する登録法が発動されると反対運動の先頭に立つ。1910年に成立した南アフリカ連邦のトランスバール共和国ではキリスト教式ではない結婚を認めない法律を定めてインド系移民の反発を呼ぶ。ガンディーはトランスバールの行進を組織し、4日間にわたって2千人を超える人々が参加した。ガンディーは逮捕されたものの、抗議の声は一段と高まり、政府はインド人救済法の制定を余儀なくされる。

初めて勝利した民衆の抵抗運動はガンディーによってサティヤグラハ＝真理の把握と名づけられた。「私は歴史全体を通していつも真理と愛が勝利をしたことを思い出す。暴君や殺戮者は無敵

に見えるが、最終的には滅びてしまう」と説き、非暴力・不服従を精神的支柱とする活動を展開していく。「非暴力は人間に与えられた最大の武器であり、人間が発明した最強の武器よりも強い力を持つ」「自分から屈してしまわない限り負けることはない」と虐げられた人々を鼓舞した。ガンディーの活躍はインドでも広く知られるようになる。

植民地解放運動の象徴として

第1次世界大戦が勃発してまもない1915年、ガンディーは45歳でインドに帰国する。イギリスからの解放をめざして国民会議派に参加し、全国各地をまわって独立運動を指導した。インド帝国政府は1919年、新たにローラット法を制定して民衆に対する取り締まりを強化する。ハルタール＝同盟休業を全国に指令し、断食と祈りによって対抗したガンディーは逮捕され、武力弾圧の嵐が吹き荒れた。パンジャブ地方アムリットサルではローラット法に抗議する非武装の市民を軍隊が無差別に銃撃して虐殺するという事件が発生した。

非暴力・不服従運動はガンディーの相次ぐ投獄によって鎮圧されたものの、1930年から塩税反対運動として復活する。イギリスの専売品として塩に重税が課されていることに抗議し、ガンディーは塩の行進を率いて海岸へ向かう。法を破って塩をつくろうとするガンディーたちに警官隊は警棒を振るって襲いかかり、流血の惨事となる。

不当な暴力に反撃せず、逃げも隠れもしないという行為には並大抵ではない勇氣と忍耐が必要とされた。のちにガンディーは「非暴力運動においていちばん重要なことは自己の内なる臆病や不安を乗り越えることである」と述懐している。

不屈の抵抗の意志表示としてガンディーは毎日、糸車を廻して絹糸を紡ぐのを日課にしていた。みずから綿布を織り上げることによって国産品の愛用・自国産業の育成を進めようとした。手織りの綿布を着て素足で糸車を廻すガンディーの姿は植民地解放運動の象徴として全世界に報道される。

ファシズムの台頭によって第2次世界大戦が1939年に火蓋を切るとガンディーは反戦の立場から非暴力・不服従運動に拍車をかける。ナチス・ドイツのヨーロッパ制圧や日本軍のアジア侵攻を

糾弾し、すべての植民地の全面的解放を訴えた。ふたたび投獄されたものの、1945年に第2次世界大戦が終結するとインド独立運動は息を吹き返す。

激戦によって国力が低下したイギリスに独立の氣運を押しとどめることはもはや不可能だった。だがガンディーの必死の説得にもかかわらず後継者のネルーは1947年、反目するインドとパキスタンの分離独立に踏み切った。

灯火の光明は周囲も照らす

統一インドの独立を望んでいたガンディーは何度も断食し、戦争状態に陥った両国の和解を促した。「自分はヒンドゥー教徒であり、イスラム教徒でもあり、原始キリスト教という意味ではキリスト教に賛同する」と公然と語っていた。しかしヒンドゥー至上主義者から敵視され、礼拝の集会に向かう途中、胸腹部に3発の銃弾を受けて急逝する。78歳だった。葬儀は国葬として営まれる。悲嘆にくれる群衆が見守るなかで亡骸はヤムナ河畔のラージガート火葬場で荼毘に付され、遺灰はガンジス川や南アフリカの海に撒かれた。

生前ガンディーは「私は非暴力が暴力よりすぐれており、赦しは罰よりも、さらに雄々しい勇氣と力があることを知っている」「弱い者はど相手を赦すことができない。赦すということは強さの証しだ」と自叙伝に書き残している。そして「われわれの信念は常に燃え続ける灯火でなければならない。それは、われわれに光明を与えるだけでなく周囲をも照らすのだ」と力説した。

世襲的な身分差別制度であるカースト制度については最下層の不可触民をハリジャン＝神の子と呼んで社会的差別に反対した。

厳格な菜食主義者で資産と言えるものは何も持っていなかった。個人的にインド綿布の白衣、草履、眼鏡、入れ歯、竹の杖などを所持していた。こうしたストイックな生活態度は「この世にあるものはすべて生成と消滅を繰り返すものと考えれば人は物欲の執着から逃れることができる」という哲学的境地に基づいていた。

インドではガンディーの偉業を記念し、誕生日である10月2日を国民の祝日と定めている。2007年の国連総会ではこの日を国際非暴力デーとして争いのない世界を希求することが決議された。